

赤鼻のトナカイ？

例年のない大雪は、正真正銘のホワイトクリスマスをもたらした。

今日は、田舎のおじいさんちでクリスマス会。

いそいそと出掛けただけ

おじいさんのうちのまわりは、一面が雪でおおわれていた。

そこで父さんと母さんは、雪かきをはじめた。

「雪かきをすると、ケーキがおいしくなるよ」

と父さん。

「少しは、父さんのおなかへっこむといいね。」

と母さん。

ぼくは、一人でソリをしていたけど、すぐにお尻がびしょ濡れになった。

おじいさんのおうちに戻ると、おばあちゃんが、

おじいさんのズボンをはかしてくれた。

だぼだぼのズボンをはいて、ぼくはまた外に出た。

すると、拓けた空き地に、かまくらができていた。

なかに入るとそこだけあったかい。

クリスマス会に来ていたみんなを呼んで、

かわりばんこにかまくらに入って写真を撮ったりして

遊んだ。

そこへ……

ササッ、ササッ

笹の葉が、擦れあうような音が聴こえ、

ソリを牽いた赤鼻のトナカイが現れた。

と思ったが、よくみると

笹の葉を引きずって、鼻を真っ赤にして歩く見知らぬ小さなおばあちゃんだった。

「いいもんができたなあ」

おばあちゃんは、ぼくらのかまくらを褒めてくれる。

「よかったら、中に入りませんか？」

と父さんが誘ったら、笹をひきずりながら、おばあちゃんがうれしそうに、

こっちにきて、しばらく大人たちが楽しそうに会話をしていた。

「快適、快適。かまくらのなかに入ったのは、生まれてはじめてじゃ。

冥途の土産ができたわい」

「冥途の土産っておばあちゃんまだまだ、お若いですよ」

「ほんでも、もう98才やでなあ。来年は白寿やわな」

「え～！ どうみても97才にしか見えませんよお」

「ひひひ。ひどお、変わらんわな。」

おばあちゃんが、手に持ったカマを振り回しながらしゃべるから、

お父さんは、そのたびに身をかかわす。

ぼくは、それがおかしくって笑い転げた。

「いや。おばあちゃんの目には輝きがあるから、まだまだ

長生きしてやとおもいますよ。」

「ほお。そうかい。これでも若い頃は、みんなが『かわいい、かわいい』いうて

もてはやしてくれたんやで」

「ははは、ところでその笹は？」

「お正月の門松に、使おうおもてな。毎年もらっとんやな。」

「それはいいですね。でもそんな茶色い服きて、笹をひっぱって歩いてたらトナカイと間違われますよ。思わずサンタを探しましたモン」

「トナカイ？まあ、かなんなあ。撃たれんうちにかえろかえろ」

ほんとうに98才には、思えないくらいしっかりしたおばあちゃんだった。

また、チラチラと雪が降ってきた。

「おーい。そろそろはじめるよ〜」

ぼくのおばあちゃんがみんなを呼ぶ声がした。

「さあ。ケーキ。ケーキ。」

お父さんが、スコップを片手に、一番に帰っていく。  
あれでは、当分おなかはへっこみそうにないな。

(この物語は、フィクションです)